

本田財団レポート No. 3

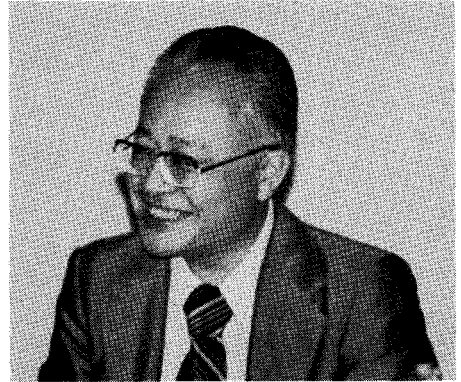
生産の時代から交流の時代へ

東京大学教授 木村 尚三郎

このレポートは昭和53年7月7日、国際文化会館において行なわれた第2回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。

## I はじめに

今日のテーマは「生産の時代から交流の時代へ」と、なっております、何故こう云う題をつけたかと、云いますと、ご承知のように最近、世界全体がひとつ大きな歴史的な変わり目に来ているのではないかと云うことです。ガルブレイスの「不確実性の時代」と云う本が大変よく売れておりますが、あそこに書かれていることも、これまで、アダム・スミスからケインズに至るまで、経済学には必ずその背後に、それを支える哲学があったのが、今やその哲学自体が見失われてしまったと云うことが書かれておりました、何かやっぱり時代の大きな転換と云うものを、あの本自体が示しているように思うわけです。



また、しばらく前から、ポスト・インタストリーソサイエティーと云う言葉が、いろいろな人によっていろいろな意味で使われているわけでありまして、ともかくも現代が、産業社会それ自体から少しちがった新しい時代へと移行しつつあるんだと云う何らかの実感を、皆がもちはじめってきていると云うことを、この言葉自体があらわしているのではないかとと思うわけです。また、1973年10月のアラブ諸国による原油価格の値上げと云うものがあり、それから既に5年近くたとうとしているわけですが、いっこうに景気が回復しない。ヨーロッパはご承知のように2%ないし3%の低成長を続けているわけです。

こう云ったことが単に原油価格の値上りだけによっておこっているのかどうか、もっとそれ以上に大きな根本的な変化と云うものがその背後にあるのではないかと、と云うことが考えられるわけです。

私はヨーロッパの歴史をこれまでやってまいりましたが、ヨーロッパを中心に、今日の時代と云うのは、どう云う時代かを考えてみたい。又それにあわせて、日本の現在というもののもっている意味を考えてみたい。それが、今日のお話をさせていただく趣旨です。

## II 交互にやって来る生産の時代・交流の時代

### 1. 時間の観念の中に生きた時代

ここに、生産の時代と交流の時代と云う風に書きましたが、歴史的に見ますと、生産の時代と交流の時代と云う、二つの時代が交互にやってきているのではないかと云うのが骨子でございます。交流の時代の方は、商業の時代と云いかえてもけっこうでございます。生産第一主義の時代から商業主義の時代へ、と云えるかと思えます。

それは、どう云うことかと申しますと、まず第一の生産第一主義の時代と申しますものは、何か新しい、今までに知られなかった新しい考えの枠組みが与えられまして、そのもとに、今までに知られなかった生産技術、知識体系と云うものが急速に発達してくる。それと共に社会が活力にみちあふれ、前へ前へと進んでゆく、昨日より今日がよく、今日より明日がいいと云った、いわば時間の観念の中に人々が生きていた時代、ないしは進歩の観念の中に人々が生きていた時代のことを云います。

### ●治金術の進歩による生産の時代

ヨーロッパ史について申しますと、今日私たちがヨーロッパにいてすぐ眼につく教会堂は、だいたい12世紀ごろ建てられ始めたものでありまして、又、今日の都市とか農村の原型もだいたい12世紀ごろであります。この12世紀を中心とする前後 200年、これが、ヨーロッパに初めてやってきた生産第一主義の時代であると云えるかと思えます。

そこにおきます基本は、治金術の進歩だったわけで、8世紀ぐらいから次第次第にラインの河口より西へ西へとフランスの方に治金術が進歩してまいりまして、これは修道院が媒介をしているわけですが、それと共に人々の手に、斧がわたるようになります。その斧でもって木を大々的に切り出したのが、11、12世紀の頃であったわけです。ご承知のようにヨーロッパの森は平地林でして、平地にカシの木がたいへん多くはえております。カシの木は秋になりますと葉がおちて、豊かな腐食土が形成されていると云うことです。カシの木を切り出した後は、大変いい小麦畑になるわけです。カシの木を大々的に切り出し、その根を取り除いて、あと、すきかえしをするわけですが、今までとちがって湿った土なものですから、今度は木製の鋤では鋤返しができない、と云うことで鉄製の鋤が必要となってまいります。鉄製の鋤を使いますと、地面に深くくいこむので、なかなか引っぱることがむづかしい、と云うことで車をつける、で車をつけてもなおかつ人間の力で引ばれないので家畜をつかうわけです。

家畜の使い方も、最初は牛、次に馬ですが、もともと首になわをつけて引っぱらせていました。そうしますと、家畜の首がしまるものですから、牛がもう引っぱれないなど云いまして、結局だめなわけです。従ってどうしても、頸木をつけて肩かけ引き綱で引かせるようになりました。又、今までは、ローマの戦車のように前に4頭馬を並列に並べて引っぱらせるわけで、非常に威勢がいいと云うか、かっこうがいいのですが、中2頭は力が出るが、両端から引っぱっている2頭は力が出ない。こう云う、牽引、繫駕方法ではダメだと云うことで、ちょうど12世紀頃、発明されるのが2頭づつたてに並べる縦列繫駕というものであります。4頭ないし、6頭立ての馬車を走らせる、場合によっては8頭までにいたしました。耕作用に使う場合は4頭ぐらいまでが普通であります。ないしは、その前に先導馬1頭立てる場合もあります。

今、馬と云いましたが、馬はもともと、軍馬用、軍用でしたが、燕麦がこの当時、たくさんできるようになりまして、12世紀末からは、馬も使い出します。馬はスピード・アップができますから、従って沢山つければ能率のよい耕作ができる。で、馬に蹄鉄をつけるのも、12世紀頃発明されたものでありまして、それより前は、馬の蹄鉄はおろか、鐙もないのが一般的であります。カール大帝の馬などに鐙はついておりません。蹄鉄が始まるとか、縦列繫駕が始まるとかするわけです。

こう云う風にして、何とかつなげまして、すき返しをいたしますと、牛であれ馬であれ、ターン・オーバーがうまくいかない。いけるとこまでいくと、もう自分の畑、人の畑おかまいなしに、とことんまで耕やし、又、そこから、横に曲がるなら曲がるなりして、又とことんまで行って下にもどってくる。

例えば、だんだん中へ入ってゆくと云う四角のウズ巻状の耕作の方法もありますし、又は、まっすぐ行ってそこで無理矢理折れ曲って、行けるとこまで行って、そこで又無理に折れ曲がる、こう云う耕作の仕方もありますが、いずれにしても、人の畑、自分の畑を、おかまいなしに耕やさなきゃならないと云うことが必要となります。

そこで共同耕作が必然化されてまいります。そうしますと、村人同士の結束が必要で、すき返しをいつやるか、種まきをいつやるか、刈入れをいつやるか、これらをみんなが取り決めまして、共同耕作をやることとなります。今度は村のまとまりと云うことが大事になってきます。そうすると今度は、村を維持するための軍事防衛の処点としての城が、12世紀頃必然的に出てまいります。

然し、城だけではまずいのでありまして、コンスタントに村に塩とか鉄が供給されなきゃいけない。本来、村は自給自足的な体制が旨ですが、完全に自給自足はできないものでありまして、どっかやっぱり、何か生産されないものがある。それは遠隔地から運んでこなきゃいけない。むしろ自閉的な自給自足的、自己完結的な、生活集団を維持するために、どっか一カ所が破れている、外からさまざまな物が入ってくる体制を作らざるを得ないと云うことで、城下町が出てまいります。

と同時に、又、村人の気持をまとめるために教会堂が、村の中央に立ち並ぶようになりまして、まさに12世紀でありまして、12世紀はまさに建築ラッシュの如く、石造りの城や教会堂ができた時代でもあります。

ある一つの生産技術のアイデアが与えられますと、そのもとで急速に技術が発達するのでありまして、ガラガラと、少しずつ発展するものではないだろうと云うことを申し上げたいわけです。

この12世紀に、今日のヨーロッパの基礎ができてまして、ここでは、農法の基本として三圃農法と云うのが完成されます。それは、畑を、人の畑、自分の畑おかまいなしに一定の耕地を三つに分けまして、冬小麦をまく畑、春小麦をまく畑、もうひとつは休耕地と云って休ませるわけです。冬小麦に使った土地は今度は春小麦の土地に使う。春小麦に使った土地は今度は休耕地に

使うと云うことで、毎年ぐるぐると回すわけですが、この三圃農法は、いったんできあがりした後、19世紀ないし20世紀まで続けられております。

常識のワク組みが与えられますと、それ自体としてはこわすものはない、あくまでもそれは続いていこうとします。それをこわしてゆくのは全く別の考えのもとでのシステムでこわしてゆくのでありまして、一たん完成されたものは、それはあくまで持続しようとする力が働くとするふうにごまかすかと思えます。その時代は従いまして新しい生産技術を手にして、ヨーロッパ人が、開墾におそろしい熱意をかけて次から次へと開墾していった時代であります。今日のエルベ川から東が開墾されたのが12、3世紀でありますし、それから、パリの西の、西フランスが開墾されましたのも、11、12世紀の頃で、冶金術の進歩と共にであったわけでございます。

この時代は人々が前へ前へと進んでゆく活気にみちた時代であります。農業社会でありますから、春・夏・秋・冬のサイクルがあるわけですが、かと云って決して停滞ではない。農業社会イコール停滞、産業社会イコール進歩と云うのは、19世紀の人間が作り上げた常識でありまして、いつも通用するわけではない。農業社会でも進歩する時代があり、産業社会でも停滞する時代がある、と云う風に云えるかと思えます。その時代は、農業作業をやっていながら、開墾してゆくわけですから、ラセン形にどんどん少しずつずつ進歩していった、まあこう云う時代であろうかと思えます。あれほど力強いパリのノートルダム寺院とか、アミアンとか、ケルンとか、ランスとか、ボーヴェーとかにゴシックのカテドラルが建ちましたし、その前に11世紀の後半からロマネスクの教会堂が建っておりまして、あそこにみられる精神的な力強さに見合うものは、19世紀しかないのではないかと思えます。

そのように世の中が動いている時代と云うのは、今までの常識がこわれてまいりますから、新しい常識の全貌をみたい、全貌をはっきりさせたいと云う気持が人々に強いわけです。それが、実際に具体化されますのが、例えばスコラ哲学と云うものでありまして、神を中心とした世界、世界像の構築がそこでなされる、これは近代科学それ自体を生み出す母体となってまいります。

と同時に、世の中が動いてゆくために、かえってそこに永遠なるものを、人々が生きてゆくための理念と云うものを具体的に形にあらわすものがほしい。こう云った気持が逆に強くなってでてくる。つまり動きのある世界であるからこそ理念を石と云う形でかためたい、これが教会堂、カテドラルとなってあらわれた、こう云うふうにごまかすかと思えます。

従いまして、生産第一主義の時代には、まさに人々は時間の観念に生きていた時代でありまして、云ってみれば、信号が全て青の中をつっぱしるような感じであります。そこでは確かに穀物生産は、前の時代に比べますと、フランスで3倍、ドイツ・イギリスで約2倍にふえているようでありますし、人口も正直にフランスで3倍、ドイツ・イギリスで2倍にふえているようであります。

## ●石炭エネルギーを中心とした生産の時代

こう云う時代がもう一度、やってまいります。これが、イギリスでは18世紀半ば、フランス・ドイツで19世紀半ばに出てまいります産業革命の時代でありまして、この時代に、またまた石炭エネルギーを中心とした新しい技術革新が行われてまいります。後には石油エネルギーが入ってまいります。

世の中が急速に変わってゆく、今まであった村共同体とか、都市ギルドであるとか、こう云ったものが急速に瓦解いたしまして、新しい会社組織がおこったり、労働組合がおこったりする。確実に世の中は昨日より今日が、今日より明日が良いと云う事態を生じるわけです。農業社会のように大自然が相手ではなく、工業が相手でありますから、人為的なシステムを組めるわけでありまして、まさに直線上の進歩の観念がそこで正当化されるわけです。

このように、前へ前へ動いてゆく、しかも、悪く動いてゆくのではなくて良く動いてゆくんだ、と云う場合には、そこに高々と理念が掲げられる。その点で中世と同じでありまして、高く高く生きると云う理想が掲げられるわけでありまして。

その理想というものをどうやって具体化するか、例えば、歴史におきまして、時代区分—古代・中世・近代と時代区分が行われますのは、これはまあ16世紀から少しづつ行われていますが、はっきりその形をとるのは19世紀でありまして、19世紀はまさに歴史の時代とも云えるものがあります。時代区分はどうしてそう云うものがなされるのか。現代の歴史家はもう時代区分をいたしません、19世紀の歴史家にとって時代区分は不可欠のものだった、しかも、古代・中世・近代、いつも三分法であります。

どう云うことかと申しますと、つまり、未来がすぐ過去になってしまう。まさに青信号ばかりのところをつっぱしるみたいなものですから、未来がすぐ過去になってしまう事態が生じるわけでありまして、現在とは一線ではない。未来と過去との間にはさまれた線ではなくて、微動する線ではない。巾がない、従って、その現在を未来と過去との両方から明らかにしたい。過去と云うのはつまり、捨て去られるべきものでありますし、未来と云うのは、自分たちが達成すべき目標であります。その過去、捨て去られるべきものを中世と考えた、達成さるべき未来を、これを古典・古代に見たわけでありまして。民主主義であれ、合理的精神であれそうです。つまり、ギリシャ・ローマについては良いところだけを見た。そして反対に、中世については克服すべき悪いところだけを見た、と云うことです。時代区分がまさに時間の観念に生きる人々の特徴をよくあらわしております。

それから、19世紀には、ヘーゲルとか、マルクスとかの大哲学がでてくる。体系的な、壮大な哲学でありまして、マルクスの場合には、無階級社会になると云う最終結論まで書いているわけです。そこには、ブルジュアは勿論、労働者にもこれから悪くなっていくんじゃない、良くなっていくんだと云う希望があり、高い理想を掲げることができた。

それだからこそ、全体を見渡す、ちょうど中世のスコラ哲学のような、全体像の揭示が必要だったと云うことが云えると思います。ちょうど12世紀の人々が永遠のカテドラルを作ったと同じように、19世紀哲学がまさにカテドラルみたいな、安定性のあるものを求めたと云えると思います。

## 2. 技術進歩の行きつまりのあとに

### ●横への空間感覚の拡大

ここで、二つめの時代ですが、生産第一主義の時代があるのに対しまして、これとは全く違った時代があるわけですが、これが早くは13世紀の半ばから、一般的には14世紀から、やってくるわけで、14世紀から17世紀いっぱいまでと、20世紀後半、とくに70年代がそうではないかと私は考えます。それはどう云う時代かと申しますと、そこでは前の時代に作られた技術の進歩と云うものがもう限界に達してしまう。つまり自分たちの常識のワク組みの中ではもう開花してしまう。これから後の進歩発展というのは、新しいワク組みが与えられなければどうにもならない。こう云う時代であります。

早い話が農業的完成がもう12世紀にでてまいりまして、13世紀前半までに三圃農法が完成しくつされてしまう。それで開墾しつくされてしまいますと、どうなるかと云いますと、あとは生産が横ばいになってまいります。良くて横ばい、良くて安全水平飛行、気候が悪くなると落ちこみであります。まさに14世紀から、農民一揆とか、戦争が激発してまいります。

後で申し上げますが、日本については18世紀のはじめからそう云った時代がおこってまいります。

その時代は、穀物の上限が決まっております。従って人間がふえれば、当然穀物が人の手にわたらなくなる、親が2人で子供が2人生まれているならばいいんですが、3人生まれ、4人生まれ、実際には7、8人か、10人ぐらい生んで、死亡率が高くて4人ぐらい生き残る。4人生き残っても困るんでありまして、必ず穀物不足を生じてまいります。そうしますと、穀物価格が騰貴する。18世紀初めは、別に天候は悪くないんですが、穀物価格は確実にあがっていることはわかっております。

と同時に人々は栄養失調におち入ってくる、従って身体に対する抵抗力は失われる、そこに病気がとりつくわけで、14世紀の1337、8年にペスト、黒死病がはやりまして、ヨーロッパの人口の $\frac{1}{3}$ から $\frac{1}{2}$ が滅ぼされたと申します。まさに自然による人口調節が過酷な形で行われるわけであります。ヨーロッパは日本と違ひまして穀物にそう栄養がありませんから、バタバタバタバ倒れてまいります。日本はご承知のように米に蛋白質も脂肪も入っておりますからなかなか死なない。向こうは赤ん坊がだいたい3人のうち1人は必ず五才になるまでに死にます。これで幼児洗礼が発達したわけです。

子供が洗礼をうけないで死にますと天国にいけない、天国に行かれないで、



地獄の端にりんぼうと云うところがありまして、そこで未来永劫になきつづけなきゃいけない。まアこれは非常にかわいそうだと云うことで、まず洗礼をうけさす、やすらかに眠らせてやるわけでありまして。時に、間引きもいたしました、だけど日本ほど過酷、大きな問題にならないのは自然が間引きしてるからであります。間引きする場合もまず洗礼をうけさしてそれから殺すわけでありまして。

ともかくも、病気による人工調節が行われる。それから飢死があります。子捨てがはやるのも、その時からであります。人口がよくて横ばい、人口に対して、生産が、悪くて落ち込みの時代であります。特に16世紀の半ばからヨーロッパ史上、最低の寒さと雨がおそってまいります。

最近、アラン・ペルフィットという人が「フランス病」と云う大変厚い本を書きましたが、彼は今、法務大臣であると同時に、プロバンと云うパリの近郊の都市の市長さんでもあります。プロバンで17世紀に、教区民がお祈りのたびにとなえた言葉があります。我らを飢えとペストと戦争から救いたまえ、と云う言葉でありまして、これはヨーロッパ中にひびいたようであります。アラン・ペルフィットはその言葉をくり返し書いている。彼はプロバンの市長だと云うこともあるけれど現在のフランスが陥っている危機と云うものをその言葉によって表現しているように思います。

ともかくも、16、17世紀は塗炭の苦しみでありまして、戦争が勃発し、飢死が起こり、ペストもはやり、本来のペストだけではなくて、風邪もかなり多かつたようではありますが、ともかくも、そう云う悪い時代であります。

そう云う悪い時代に生きた人はどうしたか、と申しますと、そこにこそ、生きる知恵を発揮した、どう云う生きる知恵かと申しますと、今では、つまり地面しか見て生きていなかった。農民ですから地面見て下向いて生きてる訳ですね。下向いて心の通い合う範囲しかつきあわない、これは農民の特徴です。自己閉鎖的な、つまり信頼のおける者同士が結束し、大地に労働力を組織的に投下する。結束しないと大地に労働力を投下できない。

つまり大地と云う、人間の粗末な頭では考えられない自然の摂理に従いながら生きていくわけですから、心の通い合い、による結び合いは大変大事であります。理性の働かす部分は非常に少ない時代であります。その下ばかり見てた人間がはじめて眼を横に向ける。つまり自分たちよりもっといい暮らしをしている人がどっかにいるんじゃないか、つまり、生きるために眼を横に向けるわけで、空間に対する配慮が初めて働らく、と云うことになる。

そこで農業上の、先進地帯と後進地帯と区別が出てまいります。豊かな地帯と貧しい地帯と区別が出てくる。その豊かな地帯に対してどうするか、二つ方法がある。まず戦争によって、豊かな地帯を奪取する、一番簡単な方法であります。アラブが原油価格を値上げするみたいなもんで一番簡単な方法であります。

もう一つの方法は、くやしいが先進地帯のけらいになって生きるって云う生き方で、これがつまり中央集権を促進してゆくわけですね。中央集権化と云

うのは今まで日本及びヨーロッパで考えるのは、先進地帯が一方的に後進地帯を圧迫してゆく過程であるというふうに考えられてきましたが、そんなことはありえないと私は思います。豊かな地帯は豊かな地帯なりにほっとけば穀物をくさらせるだけであって、特に他人とか、わり合うと云う積極的な気持をもたないはずであります。

人間と人間がかゝわりあうと云うことは大変やっかいなことでありまして、それでもって進歩発展もあるんですが、然し同時に非常にこの苦勞の多いことでもあります。

### ●交流のおこり

未開民族も、知能程度が低いから未開なのではなく、そこにいけば鳥や獣を追って暮せる、果物も実っている、だから他とかかわり合おうとしない、それだけのことです。ところが、そこにジェット機が入ってくる、コカコーラが入ってくる、アメリカがドルをおとす、東南アジアやラテンアメリカ、その他がそうです。

そこで次におこってきたのが、民族主義的な、ないしは共産主義的な政権であるわけです。

ハンティントンと云う人が、政治学者ですが、分析しているものがあります。彼によりますとアメリカは寝た子を起こしたんだ、ドルを投下し、それが産業化を進め、近代化を進めると、親米的な勢力ができると思ったところが、逆に反米的な勢力になる。なぜかといえは今までは何の他とのかゝわりなく暮してたのに、アメリカに触れてこれは大変だと云う気持を起こす、自己防衛の意識が生じる、何とかして彼らに追いつかなくちゃいけない従って共産化による産業化が一番手っとり早いと云うことで、次々とそうした民族的勢力ができてくる。寝た子を起したと云うことでありまして、本来、つまり自己充足的に生きている人々が他とかゝわりあおうとしない、都市文明を起すことがそう云う意味じゃ不満のかたまりと云いますか、生きる上で大変大きな不安とか不満があつて都市文明がおこってくるんだ、そう云う風に云えると思います。

実際、ヨーロッパで14世紀から後、都市経済が活発になってまいります。先ほど申しましたように、12世紀から都市はありますが、都市経済が活発になるのはまさに14世紀からで、戦争もひとつのコミュニケーションの手段であります、中央集権化をどうしても進めなくちゃいけない。くやしいが先進地帯の役人の云うことを聞いて従いながら生きてゆく、そのかわり自分たちも生きられるようにしてもらう、こう云う、態度を生じるわけです。

経済的に申しますと、ある特定の地方に特定の産物が出る。今までは余り物は腐らせていただけだったのを、今度は別の地方にもってゆく。別の地方の特産物を又こっちの地方にもらう、その生産は、前と同じ技術でやっているわけですが、土地と土地の持ち味をお互いに交換し合つて生きるようにしてゆく、商業と云うものを持っているのが大変重要になってまいります。

商業が各地の生産物を交換してやる、勿論生産ということが無意味であることは絶対ないんですが、生産したものを交換しあう、この方がすごく大事になってまいります。

従いまして、そこでは人々のまさに空間感覚と云うものが拡大される。云ってみれば、穀物生産それ自体は、あまり画期的にふえる可能性がない、先程も申しましたように、赤信号がずっとついておりまして、いつ青にかわるかわからない状態であります。そう云う状況だからこそ、のろのろ運転でありまして前へ前へ進めない。ここで穀物を沢山食ってしまったら後、必らず飢死しなきゃいけない。ほんのわずかししか生きられない時代であります。その分だけ横に感覚が働いてゆく。そう云う時代には、どれだけ空間感覚を働かせることができるか、これで、勝敗が決まるかと云えると思います。

こう云う風に、ヨーロッパ人が中央集権化をすゝめる一方、一部のドイツやスイスでは16世紀になりますともう工業がはじまります。工業をはじめて、フランスに売って農産物を買う、これを一番はじめにはじめたのがイギリスで、イギリスは14世紀の後半から、手織物産業をはじめこれをフランスに売っています。

つまり農業、穀物生産と云う意味では、イギリスが一番不利な条件におかれていたからです。メキシコ湾流の関係で雨が多い。雨が多いものですから従って小麦がよくできない。ブドウ酒は14世紀以降まったく作っておりません。もともと農業的に条件がよくない、従って14世紀の後半から、毛織物工業をおこしました。フランスに売る、そのかわり穀物を買う、まあ、こう云う新しい時代の面も出ておりましたけど、しかし工業がまだ一般の社会の生きる上の常識になってない。芽はたくさん出ているけども、その芽がひとつにまとまって新しい生きる体系をつくり出すのが何世紀もかゝって、18、19世紀になったと云うことの例です。

そう云う時代は、ヨーロッパの中だけで、地域と地域との結びあいが強まったわけではなくて、外にまで関心を広めてゆくわけです。例えば、北アフリカに移住したい、然し、北アフリカには、オスマントルコと云うイスラム教徒がいる、何とかしてこれをやっつけなくてはいけない、と云うことで、ヨーロッパ人が、ヨーロッパと云うものを初めて自覚したのが、共通の敵である、オスマントルコをみてのことでありまして、これが、16、17世紀からのことであります。

あれをやっつけるのはどうしたらよいか、アフリカの奥地にキリスト教の国があると云われていたので、それと手を結んで、はさみうちにしたらいいじゃないかと云うことで、15世紀に、ポルトガルの王子の、ヘンリーがチームを組みまして、アフリカ西海岸を南へ南へと下っていった。これがご承知のように希望峰を発見し、それから又インドとかアジアの国々に至る航路を発見するもってまいります。

コロンブスは、これも又、新大陸を発見いたしますが、コロンブスは何で行ったかと云うことはいろんな説があってはつきりはしていないのです。ひ

とつにこう云う考え方があります。マルコ・ポーロの東方見聞録によって、キリスト教以外の国には怪物がいる、例えば、一本足の人間がかゝれていたり、首がなくって胴に顔がかいてある、こう云うような人間が住んでいるとされていた。

そう云った怪物の国にキリスト教を広める、キリスト教を広めてキリスト教徒が住みやすくする、まさに居住環境を整備し、キリスト教徒をそこに移住させると云う、非壮なる十字軍士の気持でかけていったと云う人がおります。あるいは、そう云うことだったかもしれません。実際に新大陸への移住によりましてヨーロッパの人口調節が多少なりともできたことはまちがいないわけです。

新大陸であれ、アフリカであれ、大航海時代と云うものは、ヨーロッパ人が力があって自然に世界的に行ったんじゃないで、むしろやむにやまれず自分たちの居住空間を拡大したんだと云った方がよい。

やっぱり、生きなくちゃいかんと云うことがあって、いろんなことをするんじゃないかと、私は、勝手にそう思っているんです。ことに中央集権化と云う事態が、その当時の生産の不振と、どう関係するか、とか、空間の拡大とどう結びつくか、と云うことがはっきりしなかった。私はまさに生きるために、そうせざるをえなかったのではないかと云うふうに思うわけです。

### 3. 日本、その生産の時代・交流の時代

日本について考えてみますと、まさに、15世紀半ばから17世紀いっぱいまでが生産第一主義の時代でありまして、その時代は、大きな川から水を引いてくる技術が初めて発見される。それより前は山からおりてくる自然の流水を使いまして、それによって、山の山間部で、小さな平地を利用して小規模な水田工作、小規模な部落を作っていたにすぎなかったのが、大きな川から水を引いてくる技術が関西から発達し、関東その他越後に及んでゆくとともに、平野部での大規模な水田耕作が始まってまいります。と同時に、山間部にいた人が大規模に平野部に出てまいります。これが16・17世紀の戦国時代、江戸の初期であったと云えるかと思えます。

この時代は、新田開発が画期的に進みまして、15世紀の半ばの前と、15世紀半ばから18世紀始めまでを比べますと、課税対象となります田畑の80%が新たに開墾されております。つまり、約倍に近い新田の開発があり、それとともに人々も活気に満ち、元禄文化のような大らかな文化をうみだした時代であります。

ところが、大河から水を引いてきて平野部を開墾する動きが、18世紀始めにストップしてしまいます。開墾運動がその限界にきてしまった、ちょうど、享保の年間でございます、享保が、1735年まで続きますが、この間で新田開発がストップいたしまして、あと19世紀後半の明治維新まで、新田で開発されたのが、たった3%にすぎません。横ばい状態であります。横ばいでありまして、よくて安定水平飛行、悪くて落ちこみでありまして、多

少なりとも天候が悪くなりますと、穀物が今度はたちまちとれなくなり、従って、たちまち一揆が起こる。年に10数件から数10件の一揆がおこるようになるのは、まさに18世紀からであります。

然し一方で商業を発達させる、産物回しと申しまして、地方から地方へ廻船問屋が発達し、地方の特産物をクルクル回すようになる。と同時に、各地方毎に都市の拠点ができまいて、農村に、都市経済が浸透してまいります。農民一揆の原因としましても、借金棒引きにせよなんてのが出てまいりますのも、そのせいでもあります。と同時にそこでは、もう穀物生産の上限が決まっておりますから、穀物以外のところで、いろいろ生活を豊かにすることを考えるようになる。

18世紀半ばから、歌舞伎が発達してまいります。いろんな名優が生まれ、流派が生まれてまいります。同時に歌舞伎の俳優を描く浮世絵が発達してまいります。さまざまな俳諧とか、小説とかが発達してまいります。またその時代は、大きな枠組みが決まっていますから12世紀とか19世紀とかのヨーロッパのように一つの明確な目標を定めることができず、さまざまな模索がなされます。儒学とか国学とか、蘭学とか、いろんなもんが出てくるのはそのせいで、学問は発達し、寺子屋だとか塾が約15000、まさに世界一の高い教育水準の学問、学習塾が発達してまいります。

又、刺身をおいしく食べると云うようなこともおぼえてくるようになります。生魚を食べることも覚えてくるようになります。カツオを厚く切りフグをうすく切るようになります。厚く切ろうがうすく切ろうが栄養には変わりありませんがとにかく、おいしく食べると云うことを考えるようになる。お寿しは、これはちょっと遅くて1835年頃から、つまり幕末の頃のように、これは米がついてますからなかなかうまくいかなかったようです。

生活の質を高める。明日をめざして生きるんじゃないで、今日をより充実して生きたい。そう云う気持を生じたと思います。これこそまさにポスト・インダストリアルソサエティーの日本版だろうと思うわけで、ポスト・インダストリアル・ソサエティーと云うのは、産業をダメにしてしまう社会と云うんじゃないで、産業を土台にして生活の質、クオリティーを高める、又生活の質を高める方向で産業の照準を合わせていく、そう云う社会だろうと思うわけです。だから、脱産業社会と云う云い方は適当じゃなくて、産業後社会と云った方がいいんじゃないかと思います。まさに江戸版のポスト・インダストリアルソサエティーが出てきた。

それからまた明治に入りまして欧米から技術を取り入れ、ジェット機の離陸のような急上昇をとげてまいります。まァ、一時、大正、昭和初期のようにギクシャクした時代もありますが、基本的急上昇を続け、特に戦後はまさに一本調子の上げ調子でありまして、欧米が5世紀の間に達成した技術水準を30年でとばした感じがなくはない。これはもう革命以上の革命であったと思います。

アラン・ペルフィット氏は「フランス病」と云う本の中で、『日本は5世

紀の遅れを明治以降1世紀で取り戻した。我々はアメリカに対して1世紀の遅れしかないのだから、これを取り戻すのはさほどの時間はいらぬ』と云うことを書いておりました、日本がよい意味で引き合いに出されております。

大きな変革がここで起ったことはまちがいない、洗たく機・テレビ・自動車・クーラー・日々新しいものがふえ、それによって生活が変革されていったわけです。

### III 横との連帯への時代へ

ところで、現在はどうなんでしょうか。これからあとを考えてみまして、この10年、20年のあとに画期的な変化が起こるかどうか、その可能性がどうもよく分らない。しかし、生活の基本から変わってしまうと云う予想がどうもた、ない。いずれ原子力産業が産業の中心になるに違いない。然し、今、原子力産業がもたついている最大の原因は、原子力エネルギーを中心とした社会がどんな社会なのか、石油・石炭を中心とした社会と根本的に違うのか違わないのか、ここんところがよくわからない。これは原子力科学者自身にもよく分らないわけです。

今は、石油・石炭がないから、やむをえずそれを原子力に変えると云うだけで、基本的な枠組みそのものが、まさに石油・石炭エネルギーの枠組みそのものであって、これを持続してゆく以外ないと云うのが現状ではないかと思えます。

その意味では、技術は極度に開花しつくして、石油・石炭エネルギー中心の技術は今横ばいの状態にきているのではないか。これを突破するのは宇宙産業であるとか、原子力エネルギーを中心とした産業とか、こう云ったものが考えられますが、先程申しました様に、大河から水をひいてくる技術がないと同じ様に、原子力エネルギーと自動車がいっただいどう云う関係にあるのか、これがよくわからない。

従いまして、新しい産業体系の全貌がつかめないために、その悪い面・マイナスの面ばかりが強調され、我々は当分の間、石炭・石油エネルギーの枠組みから脱しきれないのではないか、そう云う気がいたします。その分だけ生産の上で明らかに停滞でありまして、そこで観点をかえる必要があるだろうと考えます。つまり、生産の上で停滞があると云うことは不幸だと云うことではなくて、明日のことを考えるよりも今日の生活の質を高める、そっちの方に重点を置くべきである。

ヨーロッパの経済成長は3%から4%であります。ヨーロッパ人自身、アメリカを意識し、又、日本を意識していますから、これではいかんと思っております。従ってまた、先ほどお話ししました様に、ヨーロッパでは、はっきり申しまして生産にウェイトをかけるんじゃなくて、今日を楽しむと云う方にウェイトをかけている。前へ前へ進んでどうなるのか、ヨーロッパ全体の中で、より豊かな生活を楽しむ方が幸せではないかという時代になってい

ます。まさに19世紀は夫々の国が連帯なしにアフリカを分割した。アフリカを分割したけれど、そこにアフリカ法をつくるなんてことは全然考えなかった。それは今の海洋の分割が海洋法を作ることを目指しているのとは非常に大きな違いです。それぞれの国が前へ進んでいただけで、横の連帯は考えなかった時代です。

今は横の連帯の中で一人で生きようとしています。空間観念をどれだけ拡大できるかが、それぞれの民族・国にとって生きられることの基本だと思うのですが、ヨーロッパではその空間をヨーロッパ全体にまで拡大したのが現状ではないかと思えます。しかし、その中でもある意味では大船に乗った気持もあり、自分の国だけ前へ進んでもしかたがないという気持もあります。これがつまり今日の安定成長といえますか、こういったものを支えている一番基本じゃないかと思えます。

ヨーロッパの現状をみてあれはダメじゃないかという言い方がよくなされますが、私はそうは思わないわけで、新しい時代の生き方を彼等なりに示唆してる、客観的にはそういう面をもってると思えます。ヨーロッパはヨーロッパ、アメリカはアメリカで、心を開いて横の連帯を作り上げていく、こういう雰囲気一般的になってきているように思いますが、従いまして、キリスト教の様な戦闘的な又排他的な宗教は、しだいしだいに力を失ってくると思えます。

キリスト教はむしろ戦いの宗教という面が強かったわけですが、最近はずこしヴォルテージが下がりまして、その分だけ欧米人は東洋思想に対して、すごく関心を示し出してきました。つまり、少しずつ心を開いて互いに連帯しようとしています。これは新しい時代の動きではないかと思うわけです。そういう中で我々も生きなくちゃいけないわけですから、どうやってこれから我々のイメージを高めて、つまり横の連帯をはかりうるか、こここのところが一番大事な問題だろうと思うわけです。

横の連帯をはかりうるというところで日本人は非常にマイナスでありまして、これはフランス人もそうで、これはペルフィット自身もフランスは島国だと書いております。日本もそうですがフランスも島国であります。と申しますのは、農業が非常に豊かでありますから、従って先ほどの関連で申しますと、見知らぬ他人とつきあって生きるなどということは最低でありまして、何とか自分達だけで小さくまとまって生きたい、言ってみればまわりに垣根を作ってその中で生きていく、農民的な生きかたです。

ヨーロッパの中でフランスはそういう生き方ができたわけで、16・7世紀の一番悪い時代でも、カトリックの教えをすてることはなかったのです。今ブドウ酒をのんでる地域が精神的にも安定している地域で、フランス・イタリア・スペイン等は自分の文化に対する誇りもありブドウ酒をのんでガンバったわけです。

プロテスタント圏といえますのは、やはりビール圏でありまして、ドイツとかイギリスとかがそうです。ビールなるてのはのんでしましますとすぐに

さめてしまいました、またのまなくっちゃというふうになるわけです。

精神的にずーと安定してきたフランスは、言ってみれば、他国とあまりまじわろうとしない面があります。フランス人がフランス語以外の言葉がへただというの、日本人が外国語がへただというのと同じでありまして、他の地域で本気になって住むという気がなかなかありません。ただ、日本人は外国語ができないのにコンプレックスもってますが、フランス人はえばっておりまして、神の言葉に一番近いのがフランス語だといっているのがちょっと違います。

まさに島国的フランス人ですが、これはつまり農業的に豊かであり、そこで生活できりゃ当然そうなるものです。日本はもともとまわりが海でありますし、組織的にお米を、あの栄養価の高いものを作ってまいりました関係上、つまりここがいちばん住みいいという気持ちはだれにでもある。従って外に出ようとしな。これが新しい時代には、マイナスと言わざるをえないわけです。

しかし閉鎖的な日本人ができましたのは、穀物生産が豊かになりました16・17世紀からあとのことでありまして、それより前は、山と接しながら、個別バラバラに生きてきたはずであります。でありますから、たかだか 400年位の伝統で今日の日本人の性格・民族性ができておりますから、これから新しい日本人を作り出す可能性がないわけじゃない。十分ありうると思うわけです。

特に若い人達を一人で外国にどんどん住ませるのが大事なことです。今までの留学というのは、欧米から技術を学ぶために、言ってみれば、スーパーマーケットで物を買ってくるみたいに、だまって行って、だまって勉強して帰ってくる。むこうの人にしてみれば何をしにきたかよくわからないが、何かやってる、うすきみわるいなとこうくるわけです。こんどはどこでもかまわな、ニューギニアの奥地でも、アフリカでも一人で住める、一人で生きる、一人で生きるというのは仙人の様な生きかたじゃなく、現地人とまじわって生きるということですが、そういう生き方のできる日本人を作っていく必要があるだろうと思います。

と同時に、諸外国から国費を投入して大規模に留学生を呼んでくる、でここで住んでもらう、日本語をおぼえてもらう、さしみの味もおぼえてもらう、しょうゆの味もおぼえてもらう、これが一番必要なことです。文化交流と申しましても、お茶・お花ってのはどうでもいいことで、私だって知りませんから…。日本人が知らないものを、外国人にわかるわけはないんで、私も能とが、歌舞伎とか聞かれてもさっぱりわからないんで、日本人さえ知らないものを外国人にわかれというのも無理なはなしです。

そんなことよりも日常生活が一番大事なことです。そこで、ここにいて、ここの生き方、くらし方、考え方がわかる、そして日本語を多少なりともおぼえていただく、そうすれば国へ帰りまして、日本の新聞・雑誌が読める、日本の動向がそのまま伝わる、これが文化交流の基本じゃないかと思ひます。



もちろん感情の違い、ただ一神教をとる人達と我々との違い、それはあります。その違いは、あるものはうまらだろうし、あるものはうまらないまま今後とも残るだろうと思います。そこにいくと、どうして日本は一神教をとらないんだということが、日本に住んでみると何となくわかってくる。これが大事なんだと思います。それは自分が日本人に同化することじゃないわけですが、何となくわかるということ許せるということなんです。

これはいたずらにトラブルの発生を防ぐという意味ではお互いに一人で住みあうという交流というものが、今後新しい時代を生きていく上で最も必要ではないか、と考えております。

## 本田財団レポート

- No. 1 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 昭53.5  
電気通信大学教授 合田周平
- No. 2 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって 昭53.6  
東京大学教授 公文俊平
- No. 3 生産の時代から交流の時代へ 昭53.8  
東京大学教授 木村尚三郎